届け 世界の果てまでも

令和３年７月２日
Ｎｏ．１９
文責 校長 飯久保一男

またタイトルをマイナーチェンジしました。７月の異称は「文月」です。諸説ありますが，稲の穂が実るころという意味の「穂含月（ほふみづき）」が転じたという説，七夕に書物を干す行事があり，書物（文）をひらくという意味の「文披月(ふみひろげづき)」が転じたという説などがあります。

失敗を失敗のまま終わらせない

１９６８年，アメリカの会社「３Ｍ」に勤めていたスペンサー・シルバーは，超強力な接着剤の開発をしていました。そして苦労の末に完成したのは，何とも弱々しい接着剤でした。しかしそこでシルバーは，不思議な点に気づきます。その接着剤は，ある程度の接着力がありながら，簡単にはがせるほど弱く，はがした後も接着力がなくならなかったのです。

シルバーの同僚にアーサー・フライがいました。フライは教会で賛美歌を歌うのに，紙のしおりが楽譜から落ちてしまうことをわずらわしく思っていました。そこで彼は，「シルバーの接着剤を使えば，楽譜を傷つけることなく，しおりを貼り付けることができるじゃないか！」と思いついたのです。

こうして生まれたのが，「粘着性のふせん」でした。１９８０年に「ポストイット」として商品化されると，またたく間に話題を呼び，爆発的なヒット商品となりました。

…私の仕事でもこの糊のついた「ふせん」はよく使います。発明されていないことを考えると…，そりゃぁ不便です。

超強力接着剤の開発の失敗作から「ポストイット」が生まれています。失敗作だからといって，あきらめず何か使い道はないかと探ったことで，失敗とはならなかったのです。

失敗をしない人などいません。失敗を悔やみ，落ち込むことも多々あります。そこで問われるのは，失敗をした後の切り替えです。起きてしまった事実は事実として，それをどう取り返すか，そこから何を学び，次に生かすのかが大切になります。そうすることで失敗が失敗のまま終わらないのです。

授業では，誤った考えが出てきます。初めて学ぶことに対しては，間違えることも当然です。ところが，それを嫌がる（恐れる）子どもがいることも事実です。昨年の本通信Ｎｏ．２６に載せた文章です。

私は担任をしたときは，最初の授業参観で，実験結果を予想する理科の授業をし，ワザと親が間違えそうな問題を出すことがよくありました。実験結果の予想には親にも手を挙げてもらいました（いやな担任ですよね…）。私の計画通り，多くの親が間違え（案の定，間違えてもらい），とても盛り上がった授業になりました。そうです，大人だって間違えるのです。これをきっかけにして，子どもたちには，

☆ 大人だって間違えるのだから，子どものみんなはどんどん間違えていいんだ
☆ 間違うことを恐れずにどんどん発言しようぜ

と伝え，**どんな発言でも認め合える学級** をつくろうと訴え，活発に討論できる学級を育てていきました。

子どもたちは「あぁ間違っちゃった」「私は合ってたよ」と結果に注目しがちですが，結果的には間違っていたとしても，その子の考えの【目のつけどころのよさ】や【発想のおもしろさ】や【実体験をもとに考察したよさ】とか【既習を生かそうとしたよさ】など，認めてあげられるところはたくさんあるのです。

授業では，結果は間違っていたとしても，その子がその考えを出してくれたおかげで，クラスのみんなが深く考えることができたということもよくあることです。間違った考えが出されずに，スーッと過ぎてしまう授業よりも，多くの学びが生まれる授業になります。

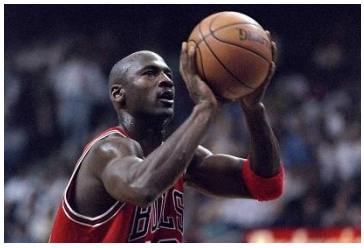
また，考えがＡとＢの２つに分かれた授業では，Ａの考えと違うＢの考えの子でも「〇〇さんの根拠からすると結論がＡになることは納得できる」という場面もよくあります。つまり，その子なりの根拠がある考えならば，結果的には間違えている考えであったとしても，他の子の考えを揺さぶり，より深く考えることにつながり，授業に大きく貢献することになるのです。これは失敗ではありません。間違えた考えがプラスに働くことは多くあるのです。授業の目的の一つは「学び方を学ぶ」ことにあるのです。

「教室はまちがうところだ」は有名な絵本（詩）のタイトルですが，教育の用語としても浸透しています。特にまだまだ発達段階にある小学生には，授業中は間違いを恐れずに，考えを出し合ってほしいと思います。本校の教職員はそういう授業づくりを目指して研修・研究を重ねています。

◇◇◇◇◇◇◇　　◇◇◇◇◇◇◇

４０００のヒットを打つには，
ぼくの数字で言うと，
８０００回以上は悔しい思いをしてきているんですよね。
それと常に自分なりに向き合ってきたことの事実はあるので，
誇れるとしたら，そこじゃないかと思いますね。　　イチロー

野球のバッターが，全ての打席でヒットやホームランを打つことはできません。超一流の選手であったイチローでも，ヒットやホームランを打った打席数よりも，打てなかった打席数の方が倍以上もあるのです。つまり，成功か失敗かといえば，失敗の方が多いのです。一流と言われるスポーツ選手は，失敗との向き合い方がとてもうまい人なのです。



私はキャリアを通じて９０００回以上のシュートをはずした。
３００回近い試合に負けた。
勝敗を決するシュートを託され，失敗したことは２６回ある。
人生で，何度も何度も何度も失敗を重ねてきた。
だから成功できたんだ。　　マイケル・ジョーダン

「バスケの神様」といわれたジョーダンも，イチローと同じようなことを言います。ジョーダンも，失敗を重ね，たくさんの失敗があったからこそ，成功したのだと言います。大切なのは心の持ち方であって，失敗を恐れずに勇気を出して挑戦し，たとえ失敗してもくじけず，再挑戦してきたと言うのです。